

破壊と伝承

人 物

正木 誠 (45) AS 東京林田選手の代理人

城 剛 (52) AS 東京の強化部長

林田 了 (33) AS 東京の選手 ※声のみ

○東京ウエルネススタジオム

大勢の観客がピッチに向かって、歓声を上げながら応援をしている。

ビジョンには『AS 東京(2)』フー

ゲスト広島(1)』のスコアが点灯。

○同・VIP ルーム

整髪料で髪を整えたスーツ姿の正木誠(45)が大きな窓ガラス越しにピッチを見下ろしている。

ドアをノックする音。

正木「どうぞ」

スーツ姿の城剛(52)が入室する。

城「これはこれも、ご無沙汰しております。正木さん」

正木「城さん、お久しぶりです。こちらこそ毎度こない席をご用意していただきありがとうございます」

握手をする正木と城。その後、正木と城は横並びになり、窓ガラス越しにピ

ッチを見下ろす。

城、ビジョンを指差し、

城「ご存知ですか？」

正木「何がですか？」

正木の視線がビジョンに向く。

城「『戦無敗なんですよ、正木さんがいら

した試合は」

正木、軽やかに笑いながら、

正木「たまたまですよ」

城「いや、たまたまではない。必然ですよ」

正木、再びピッチを見下ろす。

正木の眼差しが次第に鋭くなる。

城、正木の立ち姿を横目で見ると

城「それでは私は一旦ここで。予定通り試合

終了後に再びこちらに伺いますので、それ

までまでごゆっくりと」

正木「ありがとうございます」

城「いえいえ。では、失礼いたします」

城、VIPルームから退席する。

再びピッチを見下ろす正木の背中。

正木「…………いいチームになってきた」

○同・スタンド（タ）

ビジョンには『AS 東京（3）ーフラ

ゲスト広島（1）END』と点灯。

空席になった観客席では、大勢のスタ
ッフがゴミを片付けている。

○同・VIP ルーム（タ）

正木、ドリップメーカーでコーヒーを
淹れている。

ドアをノックする音。

正木「どうぞ」

朗らかな表情の城が入室する。

城「いやー、これで18戦無敗ですな。さす
が我らのビーナスと言ったところですか」

正木「ビーナスだなんて、やめて下さい」

城「いや、いや。ビーナス正木様」

正木「私はただ、真摯な選手をチームへ送り
込んでいる代理人なだけですよ」

向かい合った椅子に脚に一緒にのタイ

ミングで座る正木と城。

スーツの襟を正す、城。

コーヒーに口をつける、正木。

城「今日、お越しいただいたのは来季の編成についてお話ししたいと考えたからです」

頷く正木。

城「お陰様で今シーズン、ようやく上位争いのできるようになりました」

正木「それもこれも、強化部長である城さんの手腕じゃないでしょうか」

城「いえ、私は。正木さんが毎シーズン、うちの戦略に合った選手を紹介して下さっているからです」

正木「私はただ、選手ファーストの軸で活動しているまでです」

城「私が考える強さの源泉は、選手単体の強さだけではない」

正木「同感です」

城「彼らがストレスレスでプレーできる環境の構築も必要な要素だと感じています」

正木、城の言葉をゆっくりと噛み締めながら、

正木「ありがとうございます」

城「それでは、本題に入りたいのですが」

正木「はい」

城「▲人ほど選手を入れ替えたいと考えておられます」

正木「▲人？ちなみにどこのポジションをお考えですか？」

コーヒーを口につける正木。

城「中盤♡人、前線♡人を考えています」

正木「なるほど、勿論いい選手がいれば是非ともご紹介したいと考えております」

城「はい、そこはいつも通り期待しております。ただ、今回はもう一つお願いが」

正木「なんでしょう？」

城「林田選手を退団させたいんです」

正木の手が止まる。

正木「……林田ですか？」

城「はい」

正木「勿論、林田は33歳と一般的にはベテランと言われる選手ではありません」

城、笑顔のまま頷いている。

正木の瞳孔が開き始める。

正木「ただ、日々の節制、練習での姿勢、試合での立ち回り、コーチ選手間の橋渡し」

城「存じ上げております」

正木「去年締結した10年の再契約は今後を見越して締結したんじゃ？」

城「去年とは随分と昔の話をしますね」

正木「随分？そんなブレブレの強化方針では選手も安心できないと思いますが？」

笑顔で頷きながら話を聞く城。

城「まず勘違いしてほしくないのが、方針は大きく変わっていません」

正木、唾を飲み込んだ後、勢い良くコーヒーを飲み干す。

城「私たちはベテランと若手の融合を軸に今後
もチーム編成を行って行く予定です」

頷く正木。

城「その中で林田選手は非常に重要なタクト
を振るって下さいました」

正木「じゃーせめて満了まで」

城「いや、今年迄です。もう十分、期待した
働きをして下さりました」

唾を飲み込む正木。

正木「林田はこのチームで引退したいと常々
言っております」

城「正木さん。……優勝するためには、潤

滑剤ではなく起爆剤が必要なんです」

城の発言を聞き俯く正木。

城「だからこそその決断であることをご理解い
ただきたいです」

室内に沈黙が流れる。

○同・スタンド(夜)

グローライトが設置された芝生。

観客が去ったスタンド席に一人座っている正木。

虚な目元をしながら、手には携帯電話を持っている。

正木、グランドを見つめた後、ゆっくりと立席し、スタンド席を後にする。

○同・スタンド（夜）

スタンド席を照らす照明が消える。

正木、先ほどまで座っていた座席に駆け足で近寄り、勢い良く座る。

ポケットから携帯を取り出す。その後、深呼吸をする。

電話をかける、正木。

応答がない。

正木、安堵した表情をし、立ち上がる。うとする。

携帯から着信音が鳴り響く。

画面を確認する正木。

再度、座席に座り直し、一度深呼吸を

する正木。その後、電話に出る。

正木「もしもし。正木です」

林田の声「正木さん、お疲れ様です。折り返しの電話です。どうしたんですか？」

正木「……何話そうとしたっけな。あれ

だ、今日の試合の感想を聞こうと思って。

勝てて良かったな」

林田の声「……はい、お陰様で。僕は試合には出れなかったですけど」

正木「そうだな。……後ハ節、今シーズンもうすぐ終わるけどどうだったよ？」

林田の声「……あっという間ですね」

沈黙が流れる。

正木「ごめん、音声飛んでいるかも」

林田の声「……すみません、長年の勘で分かるんですけど、この電話の位置付けが」

林田の声が少し震えている。

正木、頭を抱える。

正木「ごめんな。俺が足引っ張っている」

正木、声のトーンが少し落ちる。

林田の声「いや、ここまでできたのは正木さんがいたからだと思います」

正木「いや俺はなんも。結局またしんどい時になんもできなかった」

林田の声「いや、……本当に」

正木「いや俺は、……俺はまた全うできなかったんだよ」

眉間に皺を寄せつつ上空を見る正木。
夜空に沈黙が流れる。その後、林田の深い吐息が聞こえる。

林田の声「結局、僕らはどこまで行ってもプレイヤーであり続けるんですよ」

林田の声のトーンが少し明るくなる。

正木「生涯現役はいい響きなんだけだな」

林田の声「肩を叩かれど、僕等は現役です」
せせら笑いする林田の声。

林田の声「次の移籍先探しといてください」
正木「勿論。林田の足になり続けるよ」

正木、上空を見つめながら、低いトーンで返答する。

